令和７年度 理事長・学長セレクトシンポジウム

「医学と芸術の融合から見える世界」

ー開催レポートー

WHAT'S INSIDE	● 医学と芸術、知の境界を越える「ビジョナリー・シンポジウム」開催 ● 総合大学の強みを生かし、未来の学際研究をリードする

令和7年11月9日（日）、日本大学桜門会館において、令和７年度理事長・学長セレクトシンポジウムとして、「医学と芸術の融合から見える世界-日本大学医学部・芸術学部ビジョナリー・シンポジウム-」が盛大に開催されました。本シンポジウムは、本学が誇る医学部と芸術学部という、一見すると異なる二つの領域を戦略的に「融合」させ、人間の根源的なテーマである身体性、社会性、歴史性を多角的に探究することを目的として企画されました。

当日は、会場参加に加え、オンライン視聴者を合わせ学生、教職員、校友らが参加。異なる専門的知見が交錯し、新たな学術的価値と教育的可能性の創出を目指す、本学ならではの独創的かつ先駆的な試みは、参加者からの熱心な注目を集めました。

シンポジウムの冒頭では、企画総括・司会を務めた權寧博 医学部教授（内科学系呼吸器内科学分野）から、本シンポジウムが従来の学問分野の壁を超越した新たな研究パラダイムを提示する「知の公開実験」としての役割を担うことが説明され、期待感を高めました。



I. 基調講演：「宮沢賢治の世界と〈病〉～『疾中』詩篇を中心に～」

シンポジウムは、ソコロワ山下聖美 副学長・芸術学部文芸学科教授（文芸学科）による基調講演「宮沢賢治の世界と〈病〉～『疾中』詩篇を中心に～」から幕を開けました。

ソコロワ山下副学長は、賢治の作品が文学だけでなく、身体と精神の病理とそれを乗り越えようとする「感性の飛躍」から生まれていることを示唆し、医学と芸術の融合の可能性を提示しました。この講演は、医学と芸術が交差する出発点として、両分野が持つ知が、人間の存在意義や苦悩の克服といったテーマにおいて、いかに不可分な関係にあるかを示し、芸術が持つ感性の力と、医学が扱う身体の真実を結びつけることで、本シンポジウム全体の方向性を決定づけるものとなりました。



（壇上左から；芸術学部文芸学科ソコロワ山下聖美 副学長と医学部内科学系呼吸器内科学分野の權寧博教授と）







II.シンポジウム：四つの視座から「融合」を探る

基調講演に続き、両学部の教員がそれぞれの専門的な視座からテーマにアプローチする3つのセッションが行われました。学術的な枠組みを越えた知見の融合に向け、率直かつ深奥な意見交換が展開されました。

Session I：音響学×耳鼻咽喉科学 「声とジェンダー | 音響と外科から考える多様性 |」

本セッションでは、「声」という極めて身体的かつ社会的なメディアをテーマに、多様性（ダイバーシティ）の観点から、本学のダイバーシティ委員会委員長で、医学部病態病理学系腫瘍病理学分野の増田しのぶ教授が議論が交わされました。



（壇上右；ダイバーシティ委員会委員長、医学部病態病理学系腫瘍病理学分野の増田しのぶ教授）



芸術学部音楽学科の川上央教授は音響学の視点から、声の高さや音色を決定づける物理的要素である「フォルマント」を分析し、「フォルマントからみたジェンダー」をテーマに講演。ジェンダーの社会的な構築と、生物学的な声の特徴がどのように絡み合うのかを解説しました。

一方、医学部耳鼻咽喉科学分野の中村一博准教授は、性同一性障害・性別不合に対する音声外科手術と男声・女声」をテーマに、声を物理的に変える医療行為、すなわち音声外科手術の最前線を紹介しました。医学的な治療を通じて個人のアイデンティティと社会性を再構築する試みは、科学と芸術が共通して追求する「人間らしさ」の多様な形を浮き彫りにしました。このセッションは、技術と身体、そして社会的な認識が、いかに密接に関わっているかを再認識させるものでした。

Session II：医学史×美術 「医学の眼で見る美術史」

医学の歴史的変遷と美術作品の解釈という、時間軸と視覚表現を架橋するセッションが芸術学部デザイン学科 笠井 則幸教授の司会により行われました。



（医学部血液膠原病内科学分野の中村英樹教授）

医学部血液膠原病内科学分野の中村英樹教授は、「長崎から日本人へ医学と芸術、そしてシーボルト」をテーマに講演されました。江戸時代の長崎出島を舞台に、西洋医学が日本にもたらされた歴史的経緯と、その過程で生まれた医学書や博物画といった「表現」が、当時の文化や芸術に与えた影響を考察しました。

続く、医学部微生物学分野の早川智教授は、「美術館を回診する」と題された講演は、参加者に大きな示唆を与えました。早川教授は、著名な美術作品の中に描かれた人物の症状や病態を、医師としての「医学の眼」で読み解くというユニークな視点を提示。例えば、絵画に描かれた皮膚の変色や姿勢から、その人物が罹患していた可能性のある疾患を推察する試みは、美術史の新たな鑑賞法を提案すると同時に、医学的な知見が人文学的探究の深みを生み出す可能性を示しました。歴史と美術という表現を通じて、医学の知が時代や文化を超えて共有されてきた事実が強調されました。



（壇上右から；芸術学部デザイン学科の笠井 則幸教授と微生物学分野の早川智教授）



Session III：医の現場×美術 「医の現場に息づくアート」

最終セッションでは、医学部内科学系消化器肝臓病分野 木暮 宏史教授の司会進行で、具体的な「医の現場」における芸術の役割と実践に焦点を当てました。芸術学部デザイン学科の登壇したのは、音楽、映像、演劇という具体的な芸術手法を専門とする芸術学部の教員陣です。

芸術学部音楽学科の大寺雅子教授は、「医療・福祉領域における音楽療法」をテーマに、音楽が持つ癒しの力と、それが患者の精神的・身体的な回復過程に与える具体的な効果について、実践事例を交えて紹介しました。

次に、芸術学部映画学科の大谷尚子教授は、「演劇的アプローチが拓く医療コミュニケーション」と題し、映像や演劇の手法を取り入れたロールプレイ型の医師教育プログラムの重要性を論じました。医師と患者、あるいは医療従事者間のコミュニケーション能力向上に、芸術的な「表現」や「対話」のスキルがいかに貢献するかを具体的に示しました。

そして、芸術学部演劇学科の松山立准教授は、「演劇を通じた医学と生の『対話』」をテーマに講演。演劇が持つ虚構性が、患者や医療従事者が「生と死」という重いテーマと向き合うための安全な空間（対話の場）を提供できる可能性を示唆しました。

このセッションは、芸術が単なる鑑賞の対象ではなく、医療の質を高め、患者の「生」を支えるための具体的なツール、あるいは「治療そのもの」として機能する、極めて実践的な役割を浮き彫りにしました。



（壇上右から；医学部内科学系消化器肝臓病分野の木暮 宏史教授と芸術学部演劇学科の松山立准教授）



（医学部内科学系消化器肝臓病分野の木暮 宏史教授）



（左から；芸術学部音楽学科の大寺雅子教授、映画学科の大谷尚子教授、演劇学科の松山立准教授）

全体を通して、両学部の研究者が一堂に会し、「身体」「感情」「生と死」といった共通の根源的なテーマに取り組んだことで、互いの研究手法や視点に対する理解が飛躍的に深まりました。



本シンポジウムは、日本大学の「教育・研究・社会貢献」を有機的に結びつけるモデル事業として、学際研究分野における本学のプレゼンスを高める多面的な効果をもたらしたものと確信します。